

スティーヴン・クレインの『黒い騎手』

—その「罪」と「神」—

小西康雄

スティーヴン・クレイン (Stephen Crane, 1871~1900) は、ある書簡で、自分としては『黒い騎手その他の詩集』 (*The Black Riders and Other Lines*, 1895) (以下、『黒い騎手』と略す)の方が『赤い武功章』 (*The Red Badge of Courage*, 1895) よりも好きだと述べた後、「この小さな詩集の中で、私は、自分が知っているかぎりの人生全般についての考えを表わそうとしています。

『赤い武功章』は、一つのエピソード、あるいはそれを敷衍したもの、にしかすぎません。⁽¹⁾と語っている。別の書簡でも、彼は、「私の目的は、そこ〔『黒い騎手』〕に、人生一般に関して自分がこれまで抱いてきた思想を盛り込むことです。⁽²⁾」と記している。この言葉どおり、『黒い騎手』の68篇の詩には、人生の様々な問題に対するクレインの考えが描かれている。本稿では、この詩集の中のいくつかの詩を採り上げてクレインの思想の一端について考えてみることにする。

この詩集は、次の詩で始まる。

Black riders came from the sea.

There was clang and clang of spear and shield,

And clash and clash of hoof and heel,

Wild shouts and the wave of hair

In the rush upon the wind:

Thus the ride of Sin. (I)⁽³⁾

「ヨハネの黙示録」を連想させるこの詩は、⁽⁴⁾「黒い騎手が海からやって来た (Black riders came from the sea.)」という1行目からすでに、暗示的である。「黒い騎手」とは一体何か。続く4行で、この「黒い騎手」の荒々しく凄まじい姿が描写され、最後の行では、「こうして罪は乗り込んで来た (Thus the ride of Sin.)」と鋭く言い切って、この詩は終わっている。「黒い騎手」は、つまり、「罪」であり、この詩は、「罪」が人間の世界に押し寄せて来た様を描いている。

ここでいう「罪」は、この詩集全体から考えれば明らかなように、様々な概念を含んでいる。人間の内にひそむ偽善や虚栄や卑怯、真実や愛を全うすることの出来ない弱さ、醜い争い、さらに、人間に対する神や宇宙の無関心や暴虐、などの諸々の悪を、この「罪」という言葉は意味している。こういった悪が人間の内や人間の世界に押し寄せて来たとするこの詩は、この詩集全体を包括している点で、この詩集のタイトル詩として冒頭を飾るにふさわしいものである。

修辞上からみても、この詩は、この詩集全体の詩に共通する特徴を示している。各行の詩脚数も不定で、脚韻も踏まず、全くの自由詩である。対象は、説明されたり飾られたりすることなく、書きなぐったように呈示されるだけである。こうして呈示された対象は、簡潔で暗示的でありながら、具体性に富み、強烈な存在感を与えられている。

一見乱暴とも思えるこの筆致の中にも、詳細に見ると、巧みな表現法が採られていることが分かる。2行目と3行目は、短音節語が連続し、弱強格に支配され、[k]音と[h]音の頭韻が認められる。この二行は、「黒い騎手」が槍と盾とで身を固め、蹄の響きも荒々しく押し寄せて来る情景の描写だが、規則的なリズムと鋭い音が、この情景にふさわしい効果を生み出している。ま

た、六行にわたるこの詩では、形容詩が二つしか用いられていない。1行目の“Black riders”の“Black”と、4行目の“Wild shouts”の“Wild”である。過度な修飾を切り捨てた簡潔な表現の中にあっては、数少ない修飾語が、かえって、強い印象を与える。とくに、冒頭の“Black”という語は、罪や悪を暗示し、この詩の基調を成している。この詩に限らず、『黒い騎手』の多くの詩では、「黒」のイメージが多用されている。『赤い武功章』などの作品が鮮やかな色彩に満ちているのに対して、この詩集は、「黒」で塗り込められている。

「罪」が人間の内や人間の世界に入り込んで来た情景を描いた冒頭の時に始まって、『黒い騎手』の多くの詩で、「罪」が主題として描かれている。

I stood upon a high place,
And saw, below, many devils
Running, leaping,
And carousing in sin.
One looked up, grinning,
And said, “Comrade! Brother!” (IX)

「高みに立っている (stood upon a high place)」自分は、罪や悪には無縁な世界に居ると思っている。「悪魔たち (devils)」が「罪に酔い痴れている (carousing in sin)」下方の墮落した世界とは別の、高い次元の世界に居ると思込んでいるわけである。しかし、悪魔は、そのような自分に、「仲間よ！兄弟よ！（Comrade! Brother!）」と呼びかける。自分は悪魔と同類と見做されているのだ。罪や悪とは無関係だと思っはいても、所詮人間は、悪魔と同様、罪深い存在なのである。

このような自己と罪との関係は、次の詩でも描かれている。

In the desert

I saw a creature, naked, bestial,
Who, squatting upon the ground,
Held his heart in his hands,
And ate of it.
I said, "Is it good, friend?"
"It is bitter,—bitter," he answered;
"But I like it
Because it is bitter,
And because it is my heart." (III)

「砂漠 (the desert)」という不毛の地にうずくまり、自分の心臓をむさぼり食っている「裸の獣のような (naked, bestial)」生きもの。まさにグロテスクな光景である。この生きものが己れの心臓を好むのは、「それが苦くて、／その上自分の心臓だから (Because it is bitter, / And because it is my heart)」である。心臓が「苦い」のは、それが罪に満ちているからであろう。しかも、この生きものには、この苦い心臓が己れのものであるから、一層美味に感じられるのだ。つまり、この生きものは、罪に満ちた存在であると同時に、己れの罪に浸りきった存在でもある。忌むべきこの存在に「美味いか、おい? (Is it good, friend?)」と問いかける自分は、ここでもまた、自己と罪深い存在とを同一視しているのである。

Behold, from the land of the farther suns
I returned.
And I was in a reptile-swarmling place,
Peopled, otherwise, with grimaces,
Shrouded above in black impenetrableness.
I shrank, loathing,
Sick with it.

And I said to Him,
 "What is this?
 He made answer slowly,
 "Spirit, this is a world;
 This was your home." (XXIX)

現世を離れて「霊 (spirit)」となった自分が戻って来た所は、「爬虫類が群をなしてうごめき、／また、ゆがんだ顔に満ちあふれ／暗黒に覆われた所 (a reptile-swarmling place,／Peopled, otherwise, with grimaces,／Shrouded above in black impenetrableness)」である。この吐き気を催す場所こそが、実は、「世界であり、／自分の住み処だった所 (a world;／This was your home,)」なのだ。一步離れて見ると、人間の現実の世界がいかに罪や悪に満ちた醜悪な世界なのかが分かる。人間は、これに気付かずに、この世界に生きているのである。

これまで見て来たように、「罪」は、「悪魔」や「己れの心臓をむさぼり食う生きもの」や「群をなしてうごめく爬虫類」といった、嫌悪すべきものによって象徴される。そして、これらの忌むべき存在と自己とを、はじめは無関係なものに見做すのだが、結局は同一視せざるを得ないという図式によって、クレインは、人間が罪深い存在であることを語っている。

クレインにとっての「罪」は、観念的なものではない。「黒い騎手」には、偽善や虚栄や卑怯、真実や愛を全う出来ない弱さ、といった、人間が現実の生活において犯している様々な悪が、「罪」として描かれている。この詩集に限らず、クレインの他の作品においても、この意味での「罪」が重要な位置を占めている場合が多い。例えば、『赤い武功章』では、主人公の若い兵士ヘンリーは、激しい戦闘の最中に、恐怖にかられて戦線から逃亡してしまう。これは「罪」に他ならない。「彼は、自分が犯した生々しい過ちを思い浮かべ、それが一生自分の前に立ちはだかるのではないかと思った。(He saw his vivid error, and he was afraid that it would stand before him all his life.)」⁽⁵⁾

とあるように、ヘンリーは、罪の意識にさいなまれ、逃亡という行為を何とか正当化しようとあがく。最後には、「しかし、彼は、徐々に気力を奮い起こして、この罪の意識を遠くへ迫りやった。(Yet gradually he mustered force to put the sin at a distance.)」⁽⁶⁾と、罪を克服したかのようではあるが、ある意味では、ヘンリーはここでも自己欺瞞という「罪」を犯している、と考えることが出来る。ヘンリーという人間も、「罪」から逃れられない存在なのである。また、短篇小説「青いホテル」(“The Blue Hotel”, 1899)においても、「罪」が主要な問題になっている。この物語は、一人のスウェーデン人の死を描いたものである。彼は、ある宿屋でトランプをしていて、いかさまをやった相手の一人をなぐり倒し、そこを出てから入った酒場で、ふとしたことから、ある賭博師に刺し殺されてしまう。物語は、スウェーデン人とかかわりを持った五人の男(一緒にトランプをやった東部の男とカウボーイと宿の息子、それを見ていた宿の主人、それに賭博師)のうちの二人の会話で終る。そこでの東部の男の言葉、「罪というものはどれも、みんなが一緒になってやってしまうものなんだ。おれたちは、五人とも、みんな一緒になって、このスウェーデン人を殺したんだ。(Every sin is the result of a collaboration. We, five of us, have collaborated in the murder of this Swede.)」⁽⁷⁾には、直接手を下していない者にも罪のあることが語られている。これに対するカウボーイの言葉、「だって、おれは何もしちゃいないぜ。(Well, I didn't do anything, did I?)」⁽⁸⁾には、罪を犯していながらそれに気付かない人間の姿がうかがわれる。

人間は、意識するしないにかかわらず、罪を犯す存在であり、罪から逃れることは出来ないのだという絶望が、この詩集の一つの基調となっている。

人間は「罪」を犯すものである。しかし、クレインは、罪を犯す人間を批難してはいない。罪は人間のいわば宿命であるからだ。許せないのは、罪を犯していながらそれを認めない人間である。

人間が犯す「罪」の現われの一つに「虚偽」がある。

Yes, I have a thousand tongues,
And nine and ninety-nine lie.
Though I strive to use the one,
It will make no melody at my will,
But is dead in my mouth. (IV)

「千の舌 (a thousand tongues)」のうち九百九十九までが「嘘をつく (lie)」というこの詩は、平易な比喩によって、自分の言葉にいかにも「嘘」が多いかを、率直に認めている。しかも、残りの一つの舌も、意のままにはならず、真実を語る事が出来ない、というのだ。

クレインは真実を求めた。この詩集のいくつもの詩において、真実とは何かという問がなされ、真実を追い求める人間の姿が描かれている。真実を飽くことなく追求する態度は、反面、真実とは相反する「虚偽」を嫌悪する態度につながっていく。

You say you are holy,
And that
Because I have not seen you sin.
Ay, but there are those
Who see you sin, my friend. (L)

人間は罪を犯すものである。罪を犯すのを、誰かが何処かで必らず見ているものなのだ。罪を犯すこと自体は、人間にとって、不可避なことである。しかし、罪を犯していながら自らを「高德である (holy)」などと言う人間を、クレインは認めない。このような「虚偽」や「偽善」を嫌悪する。

この嫌悪の情がさらに強い調子を帯びたものが、次の詩である。

With eye and with gesture

You say you are holy.
I say you lie;
For I did see you
Draw away your coats
From the sin upon the hands
Of a little child.
Liar! (LVII)

2行目の“*You say you are holy*”は、先の詩の1行目とまったく同じである。自らを「高德である」と言う人間は「嘘をついている (lie)」のだ。こういう人間こそ、罪に苦しむ人の救いを求める手をふりほどこうとするのである。偽善者に対する激しい怒りが、「嘘つき! (Liar!)」というわずか一語から成る最後の行で、鮮烈に示されている。

次の詩,

Charity, thou art a lie,
A toy of women,
A pleasure of certain men.
In the presence of justice,
Lo, the walls of the temple
Are visible
Through thy form of sudden shadows. (XVI)

では、クレインは、「慈善 (Charity)」を「嘘 (a lie)」だと看破する。慈善は「女どものおもちゃ、／ある種の男どもの楽しみ (A toy of women. / A pleasure of certain men)」にしかすぎない。そして、偽りである「慈善」の影を通して見える教会もまた、偽りの存在なのだ。この詩には、「慈善」の奥にひそむ虚偽や偽善や自己満足に対する痛烈な皮肉がこめられている。

この詩の「ある種の男ども」は、「礼拝堂 (the temple)」という語でも暗示されているように、聖職者を指している。また、先の二つの詩にある、自ら罪を犯しておきながら、あるいは罪に苦しむ人々の救いを求める手を拒絶しておきながら、己れを“holy (高德な、清らかな、神に身を捧げた)”などと称する人間も、聖職者と考えられる。他の詩においても、「虚偽」や「偽善」は、ほとんどの場合、聖職者や教会の内にあるものとして描かれている。クレインは、聖職者や教会の内にある虚偽や偽善に対して、激しい怒りを示したのである。

罪から逃れられない人間、あるいは虚偽や偽善に満ちた聖職者や教会について考える時、当然、その背後に存在する「神」が問題になってくる。冒頭に引用した書簡の「人生全般についての考え」の中で、「神」についての考えが、クレインにとって最も重要な問題であった。『黒い騎手』において、「神」はどのように描かれているのだろうか。

『創世記』の第1章は天地創造の物語である。神は全てのものを創った。神は全能である。したがって、神の創ったものは全て、完璧なものであった。次の詩は、これに対するパロディーである。

God fashioned the ship of the world carefully.

With the infinit skill of an All-Master

Made He the hull and the sails,

Held He the rudder

Ready for adjustment.

Erect stood He, scanning His work proudly.

Then——at fateful time——a wrong called,

And God turned, heeding.

Lo, the ship, at this opportunity, slipped slyly,

Making cunning noiseless travel down the ways.

So that, for ever rudderless, it went upon the seas

Going ridiculous voages,
Making quaint progress,
Turning as with serious purpose
Before stupid winds.
And there were many in the sky
Who laughed at this thing. (VI)

「神」が造った「世界という船 (the ship of the world)」は、神の不注意によって舵を取り付けないまま海へ出てしまい、「永久に舵なしで (for ever rudderless)」 「馬鹿げた航海を続け／奇妙な進路をとる (Going ridiculous voages, / Making quaint progress)」 ことになったのだと、この詩はいう。したがって、この「船」に乗っている人間も、このような「航海」をしなければならなくなったわけである。つまり、人間が罪を犯し悪を行なう不完全な存在であるのも、いわば神の責任なのだ。全能の神に対する痛烈や揶揄が、クレインの特色である寓話の形の中で、巧みに描かれている。

メソジスト派の牧師を父とし、やはりメソジスト派の牧師の家の出である熱心なクリスチャンを母としたクレインは、家庭での厳しい宗教教育に幼い頃から意識的に反抗したという。「子供の頃は教会や祈禱会が好きでしたが、そんな気持も冷めてしまいました。十三歳の時でしたが、叔父が火の湖やなにかの話をしてぼくをうんざりさせたことがありましたが、後で兄のウィルがぼくに、地獄なんて信じるんじゃないぞ、と言いました。」⁽⁹⁾と、クレインはある書簡で述べている。また、後にシラキュース大学に通っていた時、ある教授の「クレイン君、聖パウロは何と言っているかね。」という問に、彼は、「聖パウロの言葉は知っています。でも、ぼくは聖パウロとは意見が違います。」と答えたという。⁽¹⁰⁾クレインは、厳格な教義や人間に暴虐を加える神に反抗し、既存の伝統的な教義や神に反発したのである。

If there is a witness to my little life,

To my tiny throes and struggles,
He sees a fool;
And it is not fine gods to menace fools. (XIII)

人間は、「小さな生命 (little life)」しか持たず、「とるにたらない悩みやあがき (tiny throes and struggles)」に苦しんでいる「愚か者 (a fool)」にすぎない。このような弱い人間を神が威すのは、正しいことではない。クレインは、ここでは、厳格な教義によって人間を威圧する「神」を否定している。暗示やアイロニーによる抑制された表現が大きな特色であるクレインの詩も、先の宗教的儀善を暴く詩やこれから採り上げる「神」を扱かう詩においては、ほとんどの場合、極めて直截な調子を帯びる。これは、彼の激しい憤りの表出に他ならない。その中であって、この詩は、めずらしく抑制のきいている詩である。

次の詩は、はじめに「出エジプト記」第20章5節、「わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼすであろう。」が引用され、それに続くものである。

Well, then, I hate Thee, unrighteous picture;
Wicked image, I hate Thee;
So, strike with Thy vengeance
The heads of those little men
Who come blindly.
It will be a brave thing. (XII)

「出エジプト記」で「私を憎む者はその子孫までをも罰する」と言う神を、あえてクレインは憎む。人間は罪や悪から逃れられない弱いものであり、その人間が犯す罪の故に、「何も知らずに生まれて来る (Who come blindly)」その子孫をも罰しようとする残酷な存在は、「神」などではなく、単なる「邪悪な

像／悪意に満ちた姿 (unrighteous picture; / Wicked image)』にしかすぎない。“I hate Thee”の繰り返すと、3行目以下の痛烈な逆説が、クレインのむきだしの憎悪を示している。

A god in wrath
Was beating a man;
He cuffed him loudly
With thunderous blows
That rang and rolled over the earth.
All people came running.
The man screamed and struggled,
And bit madly at the feet of the god.
The people cried,
“Ah, what a wicked man!”
And——
“Ah, what a redoubtable god!” (XIX)

激怒した神が怒声を張り上げながら一人の男を打ち据え、男は悲鳴を上げながらもそれに逆らって神の足にかみつく。他の人たちはこの「恐ろしい (redoubtable)」神を畏怖しており、彼等からすれば、この男は「悪い (wicked)」人間である。しかし、男は、たった一人で、神に絶望的な反逆を企てるのだ。この悲劇的でもあり喜劇的でもある男は、クレイン自身の投影に他ならない。平易な言葉を用いた単純な寓話の形を採り、虚画風の滑稽な描写によって、この詩は、人間を威圧する神や厳格な教義に対するクレインのひたむきな反抗を描いている。

このように、クレインは、罪に満ちた弱い人間に対して暴虐をふるう神を憎悪した。では、彼は、いかなる「神」を求めたのであろうか。

The livid lightnings flashed in the clouds;
The leaden thunders crashed.
A worshipper raised his arm.
“Hearken! hearken! The voice of God!”

“Not so,” said a man.
“The voice of God whispers in the heart
So softly
That the soul pauses,
Making no noise,
And strives for these melodies,
Distant, sighing, like faintest breath,
And all the being is still to hear.” (XXXIX)

「青白い稲妻 (The livid lightnings)」に伴われる「重く轟く雷鳴 (The leaden thunders)」を、クレインは「神の声 (The voice of God)」とは認めない。このような威圧的な声を持つ神は、これまで見て来たとおり、人間に対して猛威をふるう神であるからだ。真の「神の声」は、「心の内で優しくささやく (whispers in the heart/So softly)」声である。「遠くの、ささやくような、かすかな息にも似た/調べ (these melodies,/Distant, sighing, like faintest breath)」である。クレインが求めたのは、自己の魂の内において優しく語りかけてくれる慈愛の「神」であった。クレインは、この詩集の詩の一つ (XXIIX) で、「真実」を、「巖や堅固なる砦 (a rock, a mighty fortress)」のようなものではなく、「息であり風であり、/影であり幻 (a breath, a wind,/A shadow, a phantom)」であると定義している。「真実」は人間を威圧するような厳しいものではなく、ひっそりとした手にすることが難しいものであるとするこの考えは、この詩の「神」に対する考えと似ている。クレインにとっての「神」は、「真実」と同様、人間を圧する厳しいものではなく、自己の心

の内にある優しい、そして捉え難いものだ。

この詩の第1連は、主として弱強格から成り規則的なリズムが続いていくが、4行目“Hearken! hearken!”で突然リズムが逆転し、強弱格が現われる。この急激なリズムの変化は、重々しく鋭い響きを生み出している。また、この連では、[k]音などの鋭い音が多用されている。これに対して第2連においては、リズムは規則制を失って流動的になり、音の上では[m]音、[n]音、[s]音などの柔らかい音が目立っている。これらの二つの節の対照的なリズムと音の現われ方は、「怒れる神」と「優しき神」を描くそれぞれの節の内容に即して、巧みな効果をあげている。

A man went before a strange God——

The God of many men, sadly wise.

And the Deity thundered loudly,

Fat with rage, and puffing,

“Kneel, mortal, and cringe

And grovel and do homage

To My Particularly Sublime Majesty.”

The man fled.

Then the man went to another God——

The God of his inner thoughts.

And this one looked at him

With soft eyes

Lit with infinite comprehension,

And said, “My poor child!” (LI)

この詩も、二つの「神」を対照的に描いている。前半にある「多くの人々の神

「(The God of many men)」は、多くの人々が信じている（あるいは信じさせられている）伝統的な「神」である。この「神」は、怒り狂っていて、人間に「恭順の意 (homage)」を強要する。これに対して後半で描かれる「神」は、「内なる心の神 (The God of his inner thoughts)」であり、「限りない包容力に満ちた／優しい眼 (soft eyes/Lit with infinite comprehension)」をした「神」である。この「神」は、人に優しく声をかけてもくれる。ここでも、クレインは、厳格な教義に基づく怒りの神を拒否し、自己の魂の内にある愛に満ちた神を求めている。彼は、伝統的な既存の「外なる神」を拒絶し、自己の「内なる神」を求めたのである。

このような慈愛に満ちた優しい「神」は、クレインにとって、はたして存在したのであろうか。

Walking in the sky,
A man in strange black garb
Encountered a radiant form,
Then his steps were eager;
Bowed he devoutly.
“My Lord,” said he.
But the Spirit knew him not. (LIX)

「奇妙な黒い衣服をまとった男 (A man in strange black garb)」は、聖職者、しかもこれまで見て来たいくつかの詩にあるような、偽善に満ちた聖職者であろう。男は、「燦然たる姿 (a radiant form)」つまり「神」に出会い、「うやうやしく頭を垂れる (Bowed he devoutly)」が、「神」は、こんな男など知らない。自ら罪を犯しているながら己れは清く正しいと言う偽善者などには、「神」は無関心なのだ。しかし、それだけではない。本来、人間は、罪深く、弱いものである。いかなる人間をも包み込んで救ってくれるのが「真の神」であるはずなのに、そういう人間にも、この「神」は無関心なのである。

偽善に満ちた聖職者に対するアイロニーと、人間に無関心な神に対するアイロニーとを、巧みな比喩と暗示、簡潔な寓話の形によって、見事に描いているこの詩は、クレインの特質を十二分に示している。

God lay dead in heaven ;
Angels sang the hymn of the end ;
Purple winds went moaning,
Their wings drip-dripping
With blood
That fell upon the earth.
It, groaning thing,
Turned black and sank.
Then from the far caverns
Of dead sins
Came monsters, livid with desire.
They fought,
Wrangled over the world,
A morsel.
But of all sadness this was sad——
A woman's arms tried to shield
The head of a sleeping man
From the jaws of the final beast. (LXVII)

この詩は、この詩集の終りから2番目にある詩である。「神は死んで天に横たわっていた (God lay dead in heaven ;)」と、1行目で「神」の死が述べられる。これは、勿論、クレインが求め続けた「慈愛の神」の死である。「慈愛の神」の死によって、世界は「暗黒に変わり破滅してしまう (Turned black and sank)。」そして、「恐ろしい罪に満ちた／彼方の洞窟から／醜悪な化け物

どもが、欲望に責ざめて、やって来た (from the far caverns / Of dead snes /
Came monsters, livid with desire)」のである。「慈愛の神」はもはや存在せ
ず、世界は罪や悪に満ちているのだという絶望が、ここに述べられている。

これに続く次の詩で、この詩集は終る。

A spirit sped
Through spaces of night ;
And as he sped, he called,
“God! God!”
He went through valleys
Of black death-slime,
Ever calling,
“God! God!”
Their echoes
From crevice and cavern
Mocked him :
“God! God! God!”
Fleetly into the plains of space
He went, ever calling,
“God! God!”
Eventually, then, he screamed,
Mad in denial,
“Ah, there is no God!”
A swift hand,
A sword from the sky,
Smote him,
And he was dead. (LXVIII)

短音節話の多用と短い行によるスピーディーなリズム、簡潔な表現、「黒」のイメージ。これらが効果と迫力を生み出している。

暗黒の世界の中で、神を懸命に求め続ける人間。しかし、彼は神を見出すことが出来ない。絶望して神の存在を否定した瞬間、彼は神によって殺されてしまう。人間に対して無関心でありながら、存在を否定されると、暴虐な行為を行なう恐ろしい神の姿が、ここにある。「夜の空 (spaces of night)」や「暗黒の死のへドロの／谷間 (valleys / Of black death-slime)」は、罪や悪に満ちた現実の世界であり、そのような世界であるからこそ「慈愛の神」を求めようとするのだが、あるのはただ「怒りの神」だけなのである。

「罪」の到来によって始まったこの詩集は、それらから人間を救い出してくれる真の「神」を見出せぬまま、絶望によって終わっている。

『黒い騎手』で、クレインは、人生に関する様々な問題についての考えを描いた。その考え方の基盤を成すものは、彼の真摯な態度である。誠実で妥協のない、若々しい純粹なもの見方によって、彼は、人生の諸相を捉えた。飽くことなく真実を追求し、真実に反するものを厳しく弾劾し、そして、真実を全う出来ないことに絶望した。

クレインは、このような自己の思想を表現するにあたって、従来の伝統的な形式を拒絶した。何ものにもとられない自然発生的な表現法——自由な詩形、超現実的でグロテスクでかつ明確なイメージ、痛烈なアイロニー、平易で日常的な言葉、荒々しい形、など——の中に、彼は、自分の思想を表わした。

自己の真情をあるがままの形に託した『黒い騎手』は、クレインの激怒と絶望の世界である。

注

- (1) Joseph Katz, *The Poems of Stephen Crane* (New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1976), p. XVII.
- (2) *Ibid.*, p. XXIX.
- (3) テキストは, Follet, Wilson, ed. *The Work of Stephen Crane*. 12 vols.

New York: Knopf, 1925-27. の Vol. VI を用いた。なお、この詩集の各詩にはタイトルはなく、ローマ数字が付されている。本稿では、引用した詩の末尾に、この数字を付す。

- (4) Joseph Katz, *op. cit.*, p. XXX.
- (5) Wilson Follet (ed.), *The Work of Stephen Crane*, Vol. I, p. 199.
- (6) *Loc. cit.*
- (7) Wilson Follet (ed.), *op. cit.*, Vol. X, p. 131.
- (8) *Ibid.*, p. 132.
- (9) Chesler L. Wolford, *The Anger of Stephen Crane* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1983), p. 2.
- (10) *Loc. cit.*